

四月から五月にかけてニューヨークで開催された国連資源総会に中国代表団を率いて出席した鄧小平・中国副首相のさっそうたる姿は、激動の相次いだ中国内政を見つめてきた者にとつて、きわめて印象深いものであった。鄧小平副首相の国際場裏におけるこのような雄姿は、かつて一九六三年、中ソ決裂を確認させたモスクワでの中ソ両共産党会談に中国側代表として出席して以来のものであったが、このような鄧小平副首相の最近の活躍を、文化大革命当時の状

## ●外交時評

# 鄧小平副首相の活躍

中嶋嶺雄(東京外国語大学助教授)



況と対比してみても、そこに中国政治における激動の軌跡をまざまざと実感するのは、私だけではないであろう。

もとより私自身は、文化大革命の收拾過程において、早くから鄧小平副首相の復権を予測してきた。そして、きわめて有能な党官僚であり理論家かつオルガナイザーである鄧小平副首相のこれまでの実力を考えたとき、林彪異変以後の中国における政治的リーダーシップの空隙のなかで、鄧小平副首相が大きな役割を担うことには、本来、不可解な点はないはずである。

だが、文化大革命の時期の鄧小平副首相への批判が、毛沢東主席自身の鄧小平批判にも関連して、きわめてシリアスなものであったことも忘れることはできない。私自身、一九六六年秋に訪中した際、鄧小平副首相が一九六五年二月に、北京の国際飯店で反革命陰謀の会議を開いたこと、同三月に反毛沢東策動の会議を開いたこと、中国の「ベトフイ・クラブ」の黒幕であったことなどを微細に批判されて、当面の打倒すべき敵の第二号として名指されていた大字報

・小字報を目撃したことがある。

しかも、鄧小平副首相は、一九五六年の八全大会では、「個人が重要な問題を決定することは、共産主義政党的党建設の原則にそむくものであり、必ず誤りを犯さないうてはすみません」(「党規約改正報告」と述べて、明らかに個人崇拜に挑戦し、党の集団指導を強調したというスケールの大きい過去をもっている。

このような鄧小平副首相の復権(昨年四月)であっただけに、その将来が注目されていたのだが、最近、内外両面にわたる鄧小平副首相の

活躍には目覚しいものがあり、一方周恩来総理の活躍が、一時期のような精彩を失いつつあるかに見える。もとより、周総理の健康上の問題も伝えられておりであろうが、やはり、問題は政治的な関連において見ねばならないように思われる。

私は、今日の中国において、周恩来失脚の可能性を考えることは、周総理のあまりにも重要な役割と中国の必要からして、きわめて根拠の薄い見方だと思いが、しかし、昨年夏以来の「批林批孔」運動のなかに、周恩来批判の潮流が潜在しつつづづけていることを否定するわけにはいかないことも事実である。この点をもっとも象徴的に示しているのが、最近の『紅旗』第四号所収の「批林批孔」運動特集のような諸論文であり、そこには明らかに周恩来批判が含意されていると見なければならぬ。

こうしてみると、中国の内政には依然として問題がくすぶっているといわねばならず、公式に予告された全国人民代表大会が依然として開催され得ないことの意味も、この点から考えねばなるまい。そのような状況のなかで、文化大革命の一時期には批判的であった鄧小平副首相が、毛・周両首脳から、ある意味で「等距離」の第三のエースとして再び大きな役割を担いつつあるように思われる。鄧小平氏もすでに七十二歳だといえ、当面、鄧小平副首相の活躍場面がさらに増大するのではなからうか。